

第10回日本学術会議経営工学研連シンポジウム ルポ

電力中央研究所 桑畑 暁生

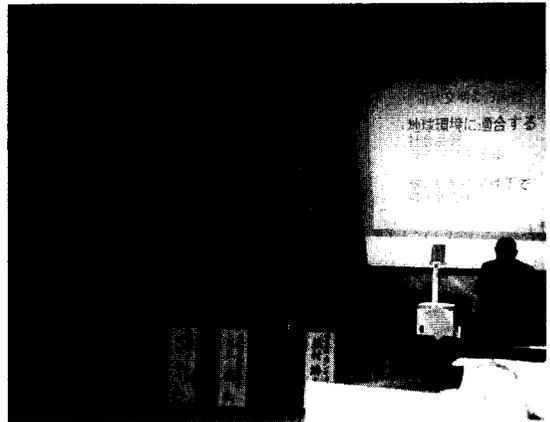
FMESシンポジウムは、「社会品質と生産文化」と題して7月8日、日本学術会議講堂にて開催された。当日は、120名の参加者を得て盛況であった。シンポジウムに先立ち、日本学術会議経営工学研究連絡委員会委員長 森村英典先生より、開会の挨拶ならびに「FMESの歴史と将来への展望」についての報告があった。

今回のシンポジウムは、地球の有限化、資源の枯渇化、地球環境の劣化、人口爆発などの問題に対応するには、「哲学・理念」、「方法論」、「社会的機能組織としての企業の役割」などの側面から多角的かつ抜本的に検討し、地球環境に適合する生産文化を創造するために、厳しい制約条件下での社会品質の最大化を目的として開催されたもので、今回のテーマに造詣が深い3名の方々から特別講演がなされた。

最初に明治学院大学 竹内 啓先生は「社会品質と統計的方法」と題して統計学の観点から見た社会品質とはなにかというテーマを中心に講演され、昨今問題として取り上げられている生産者責任を考慮した際の品質管理のポイントとして、外部情報の取り込みと内部情報の公開が重要になってくるであろうと説かれた。

ついでオーケン社長 田口 玄一氏は「生産性と品質工学」と題して講演され、生産性の改善を行なうにあたり、量の改善より品質の改善の方が望ましく、基本機能に着目した品質工学にもとづき改善を行なうのが望ましいという考えを述べられた。生産性を直接引き上げるのは技術そのものであるが、その評価・検討の際、氏が提唱してこられた動的SN比などの手法による生産性向上の評価の有用性について講演された。

最後に、日本電気取締役の 三上 徹氏は「新しい生産文化創造における企業の役割」と題して講演され、実業の立場からの生産文化をどうとらえ、創造していくかについてその思想と将来像について示唆に富むお話をいただいた。大量生産・消費・廃棄というこれまでのパラダイムの危機を乗り越え、新たな生産パラダイムを求める生産者側から見た生産文化のシフトについて語られ、その中では循環型社会を指向したモノ作りの要点として、設計段階から環境を考えたモノ作り、省エネ・リサイクル生産システム、余分な物を作らないリーン生産を力説された。従来の生産性のみを追求したモノ作りから廃棄、



回収まで考慮した生産を実現するために、実学としてのORに求められる手法、考え方も大いに変わっていく時期にさしかかっているという印象を強くした。

コーヒーブレイクの後、青山学院大学 佐久間 章行先生をパネルリーダーとしたパネル討論会が催された。上記3名に(株)カンキョー代表取締役 藤村 靖之氏を加え、活発なディスカッションが行なわれた。昨今問題となっている資源の枯渇化と地球環境問題を中心に意見交換が行なわれ、国際社会の中で日本の置かれている状況も鑑み生産文化、技術の創造が重要になってくるであろうとの意見などが交換された。最後に東京大学 久米 先生の閉会挨拶の後、シンポジウムは幕を閉じた。

今回のシンポジウムは従来からの生産性の追求というパラダイムの転換を求められる現在、どのような理念のもとに新しい生産文化を創造していくかという問題について種々の側面からその方向性と考え方が提起された。参加者は多岐の分野にわたったと思われるが、今回のシンポジウムがその参加者全員にとり、今回のテーマの重要性の再認識の場となり、今後の研究の発展に寄与するものと信じて報告を終りたい。

日本OR学会 報文集刊行のお知らせ
最新刊

T-94-1 New Direction in Simulation
for Manufacturing and Communications

(547頁、ハードカバー)

会員価格 6,000円 (送料別)